閑話独言

「霊泉延年」

蔵王温泉観光協会長
斉藤　長右衛門

蔵王温泉について誌上を借り紹介いたします。開湯して1900年余。伝説によりますと、日本武尊(やまとたける)に従った吉備多賀由(きびのたかゆ)が西暦110年ごろ東征した際、発見したと言われております。多賀由転じて高湯と呼ばれ古来、湯治場として知れ渡り、1950(昭和25)年、毎日新聞社主催公募の「新日本観光地百選」で蔵王連峰が山岳部門で第1位となったのを機に蔵王温泉と改称されました。

私の経営する『わかまつや』は創業1655(明暦元)年。歌人斎藤茂吉ゆかりの宿でもあります。祖父斉藤長右衛門が茂吉と同じ1882(明治15)年生まれ。東京外語大英文科に進み、東大に進学した茂吉と浅草で学生時代を送りました。文字通り肝胆相照らした仲で、歌人として大成をなした後も茂吉は帰郷の折りには必ず宿を訪れました。直筆の書が宿に遺されています。なかでも90畳の大広間に掛けている書は、ほかでは見られないものです。理由は「茂吉の三無い」という言葉です。大きな字を書かない、為書きはしない、直筆は碑にしないというものですが、大広間の書は大文字で『霊泉延年』と揮毫＝**写真**＝。右わきに「為高湯温泉若松屋主人」と為書きがあります。碑にすることもまた許されました。

あらためて強調することではありませんが、蔵王は全国屈指の温泉地であります。が、ともすれば戦後になってから「スキーのＺＡＯ」が余りにも有名となり、由緒正しい温泉の存在を(私たち温泉関係者は)傍らに置いていた感がいなめません。象徴する言葉が「蔵王の100日戦争」です。１年分の収入をスキーシーズンで稼ぐということを意味し、春、夏、秋のグリーンシーズン265日間をおろそかにしていたのでは、との反省です。

何しろ１日50～60台もの観光バスがスキーヤーを運んで来たのですから。しかし、同時にこうした成功体験が災いし、「四季を通じたリゾート地へ」の取り組みが遅れてしまいました。やがてスキーバブルは弾けました。

仲間とともに蔵王再生に向けて検討を開始しました。キーワードはまず「蔵王温泉新世紀ー山形市民、県民に愛される蔵王になる」ということです。２つ目はグリーンシーズンの充実。蔵王は1964年に日本百名山に選定されました。この美しい大自然を活かそうということです。そこには霊地、修験道の山としての蔵王の歴史(「大権現」「地蔵様」「大黒様」の3大神と、「酢川温泉」「蔵王」「竜山」の３神社など)を加味します。３つ目は「１店１品運動」の展開。美味しい食事、土産品、民芸品など193ある温泉の旅館、商店それぞれが自慢の1品を提供しようという事業です。温泉街のクリーン化、登山道の整備も大事なことです。

こうした取り組みを加速させるため、蔵王活性化プログラムを作成し企業のメセナ事業に応募。また勉強会に参加しています。もちろん「スキー」は蔵王の最大ブランド。リピーターを確保するためにどうすればいいか、などを課題に成功地を視察しています。

山形市街地との連携も大切な事です。市中心部の新観光拠点のみならず、老舗の若手経営者たちが新たな試みをしています。蔵王を訪れた方々を大いに紹介していきたい。「蔵王のため」だけではなく「蔵王が山形のため何をしなければならないか」という視点です。山形は今年から来年にかけて山形デスティネーションキャンペーンを柱に、観光ビッグイベントが続きます。一過性のおまつりではなく、地に足の着いた観光立県の基礎固めの契機としなければなりません。県内最大の観光地としての自負と責任を持って、祖先が守ってきた遺産をブラッシュアップ(磨きを掛ける)し続けることが大切だと考えています。

(蔵王温泉旅館『わかまつや』代表)